

レポーター：学芸員の宮野さんです。よろしくお願いします。

学芸員：よろしくお願いします。

レポーター：宮野さん、こちらはこういった掛軸なんですか。

学芸員：えーとですね、鎧を着たですね、まあ武将達がずらりと描かれていますけど、黒田二十四騎図という絵ですね。はい。で、一番真ん中の一番上に描かれているのが黒田長政とって、福岡藩の初代藩主、殿様ですね。この人です。で、その下に描かれているのが長政の家臣達。で、黒田家の一番最初の時期ですね。飛躍を遂げてく、そういう時期を支えた24人の重臣達です。でまあ、だいたい一番上に描かれている3人が長政のおじさん達、いわゆる黒田如水、官兵衛さんですね。あれの兄弟達です。黒田利高、黒田直之ですね、黒田利則、この3人でまず固めまして、その下にまた3人がきて、これはやはり黒田如水からずっと仕えている黒田家の家老クラスにあたるですね、栗山、井上、そしてこれが酒は飲め飲め飲むならばで有名な、日本号の槍を飲み取った母里太兵衛ですね、とかが並んでいます。あとは、歴々たる武将がずらっと。播磨時代からずっと仕えている人達で古くからこう支えてきた人達を江戸時代にですね、だいたい中期ごろから二十四騎という呼び方でですね、顕彰活動とかかほめたたえる動きなんかですね、出てきてこういう絵が描かれるようになりました。これ自体は19世紀ごろの、こちらに描いた人・尾形探香というですね福岡藩の御用絵師ですね。この人が描いたものでして、まあいったら藩の公式の二十四騎図という風にいえるものです。はい。

レポーター：このような掛軸はいつごろからあるんですか。

学芸員：そうですね、先ほど江戸時代の中期といいましたけども、ちょっとあちらの方
にですね、ちょっと古いのお出ししておりますので、ちょっと移動してみましよう。

レポーター：先ほどの掛軸とは、色や大きさもまた異なりますね。

学芸員：そうですね、大分小さくて細くて、人物の配置もちょっとレイアウトが違うんじゃないかなと思いますけど。これは一応当館が貯蔵している中では一番古いものと考えられています。で、年代とかは書かれてないんですけど、実はこれとまるっきり同じですね、絵で下絵のようなものですね、伝わってまして。こちらに享保年間の年号がですね、描かれてまして、でまあその下絵があることから、これもほぼ同時代ごろに遡るであろうと、いう風に考えられています。

学芸員：さっきとちょっと違うのが、一番トップにいた長政さんが兜だけでちょっと象徴されています。これはいろんなバリエーションがあるんで、時代によってっていうことは、一概にはいえないんですけど、他で違うところといたら、各武将がですね、さっきとちょっと鎧の感じが違うかと思いますが、いわゆるなんていうか大鎧風とか中世の武士が着ていたような、そういうちょっと袖も大きくて、いかにも絵画的な表現になっているというのが大きな違いですね。で、あと兜の飾りなんかもで

すね、これ実際に各子孫の家に伝わっている兜っていうのが残っている場合もあって。それらと比べても、大分ちょっとゆるめというか、間違っちはっちゃてるような形がですね、描かれてまして。そういうちょっと違いが先ほどのものからはあります。で、一応これがですね、誰が描いたんだろうかっていうのが、一番最初に誰が一体これを始めたんだろうかというのがあります。まだまだ、今調べているところなんですけども、一応ですね、いろんな記録見ていくとですね、この中の一人、原左衛門種良という人物がいるんですけど、この子孫が描いたであろうという二十四騎図が割とこれとあんまり変わらない時代に描かれています。

学芸員：それがちょっとそちらにあります。こちらがですね、その二十四騎図です。大分段々となんというかこうタッチが素朴になっていく気がするかもしれませんが、これがですね、書き付け、ちょっとメモがですね、この掛軸と一緒に伝わってまして。そこに、原種良という人物の子孫が、種次という人物が家に伝わってた種良さんの肖像画を元に描いて、他の二十四騎の分も描きましたというようなメモが残っててですね、二十四騎の中の人がこの絵をですね、広めようとそういうのがあったんだなというのがわかるものです。はい。確かに素人っぽい感じが伝わってきて面白いですけど。はい。一番最初にご紹介した尾形家の絵から一番割と古手になるこっちへ遡ってきたわけですけども、こういった絵から尾形家のきれいな絵に至るまでいろんなプロセスがありまして、そこを簡単にちょっとこれからお話しさせていただこうと思います。こちらがですね、その資料なんですけども、さきほどまでの二十四騎図が一つの掛軸に集合した形で描かれてたと思うんですけど、これは一人一人をより大きく細かく別々に描いた絵で一番最初に紹介した二十四騎図の完成に至るまでのいろんな調査資料のうちの一つです。

学芸員：はい。見ていただくとですね、おわかりになるように、名前の右側とかにいろんな情報が書きこまれてます。これはまあ例えば、肖像画自体が残っている人も何人かいてですね、肖像画の絵の上にですね、その人の一生、経歴がみたいなのが書かれてるんですけど、そうゆう情報が書き写されたりですね、いろいろ調べていったんだなっていうのがわかるものですね。で面白いのがですね、子孫が途中で家が断絶してしまったり、している場合もあるんですけど、なんにも鎧とかですね、肖像画とか伝わってない場合もあるんですね。そういったときどうしたのかなって、いうのでですね、いろいろ見てみたらですね、いわゆる甲冑の本とかですね、当時印刷物で出回っていたようなああいうのから、こういう兜かぶってたから形はこれでいいんじゃないかね、というようなそういう記録までですね、描かれているものもあったりしてですね、なるだけほんと、正確なさも実在したかのようにこう描こうというですね、考えがわかります。

レポーター：じゃあ、お顔とかも情報がない方は。想像。

学芸員：想像ですね。ですので、こうやって見ると、一様に皆さんほんとに実在したかのようにリアルに描かれているんですけど、中にはもう言い伝えだけで、こんな顔だったろうね、っていう風にやった人もいます。

レポーター：面白いですね。

学芸員：そうですね。面白いのが、結局二十四騎図というのが、まあある時点、だいたい朝鮮出兵ごろのだいたい皆さん生きていた人達なので全員がそろってですね、そのころの姿を描いたんだらうって、いう風にいわれるんですけど、中にはですね、年齢がちょっとよくわからなくなっている絵があります。それが、そうですねこちらのですね、黒田三左衛門一成という方です。

レポーター：立派な兜かぶってらっしゃいますね。

学芸員：そうですね。二十四騎の中で一番大きな飾りをつけている人ですね。他の人が縦に描かれてますけど、この人だけは入りきれなくて横になってますけど。いろんな伝記なんかを見てもですね、この大きな飾り、脇立というんですけど、これがあったことで戦場で目立ちすぎてしまったためですね、鉄砲の的になってしまった、そんなエピソードも伝わって。

レポーター：こんなに大きかったら、重さはきっと。

学芸員：でも飾り自体はすごく薄くてですね、木でできているので、ふにゃふにゃふにゃ曲がるようなそういう材質です。軽いものですね。はい。でこの人のお顔を見ていただくと、すごくこうおじいさんに描かれている。

レポーター：そうですね。

学芸員：と思いますけど、実はこの人二十四騎の中では一番若手なんですよ。

レポーター：えっ、どうしてですか。

学芸員：なぜ、こうなったのかというと、残っていた肖像画っていうのが、この人 80 才を超えるまで長生きをしていたため、おじいさんの絵しか残ってないんですね。

レポーター：それで。

学芸員：そうそれで、描いたときにはこうなってしまった。だから時代がちょっと同じ絵に収まっているんですけど、すごくこう正確になりすぎたのかなんだかよくわからないちょっとそういうところで、面白いところも見られる。

レポーター：ほんとですね。じゃあもう若いころの肖像画が残っている方は。

学芸員：そうですね、若くして亡くなった人とかはそういう形になりますね。で、こうやって段々調査を進めて、正確なというか、本物らしい二十四騎図が作られてくるんですけど、江戸時代もほんと終わりの方になってですね、またこれが違った展開を見せることになります。こちらの二十四騎図をご覧ください。これまでとまた違った雰囲気かとは思いますが。

レポーター：今までは、様々な色を使って描かれていたんですけども、一気に黒一色と

うか。はい。

学芸員：これはまあいったら印刷物、刷り物でして、版画ですね。で、何がちょっと違うのかというと、上にですね、黒田大明神と書かれています。二十四騎霊神とかも書かれていますけど、これどういうことかということ、二十四騎自体がですね、神様になってですね、みんなからこうなんていうか信仰される対象になったということがわかるそういう二十四騎図ですね。

学芸員：ここに黒崎駅鎮座ってある。黒崎にある春日神社さんっていう神社があつてですね、そちらでお祭りされています。そこで、今もですね、この二十四騎を刷った版木、元の版木ですね、も伝わってまして、これを刷って広くみんなに配って二十四騎の信仰というの広まっていったんだなっていうのがわかるものですね。

レポーター：そしたら、黒崎の春日神社で、見ることができるんですか。

学芸員：そうですね、春日神社さんで常時飾っているかどうかちょっとわからないんですけど、版木は伝わってます。あちらは二十四騎の行列でお祭りとかもされてまして、非常に二十四騎熱というか高いといえます。というのも、この中の一人井上之房さんというこの人ですね。この人が江戸時代はじめに黒崎城というお城の城主でして、春日神社さん自体もちょっと井上さんにつながりがあるところなんで、そういった意味で黒崎という場所で信仰がおこったようです。はい。というより二十四騎図といってもですね、うちがもうそうですね、20点以上ちょっと収集してまして、あんまり美術品としては見られないものなんですけども、こういったいろいろな情報をですね、読み取れる絵として、ほんとにおもしろいものなんだなあと思います。

レポーター：いつもここ福岡市博物館って見ることができるんですか。

学芸員：残念ながら、これは常設展示はしてないのでですね、企画展なんかにはですね、出す機会がありますので、そういったときは足をお運びいただけるかと思います。